



DOUBLE PRINCESS KNIGHT

# ダブル姫騎士

隷辱の王室

第一章	姫騎士共闘	006
第二章	鮮血のファーストインサート	045
第三章	恥辱の騎士乙女	075
第四章	エルフ少女、受胎へのいざない	105
第五章	白濁に染まる双乳	126
第六章	牡と牝の快楽	155
第七章	公開恥刑	178
第八章	出産∞授乳	210
第九章	白濁のプリンセスナイツ	229

## 登場人物紹介

Characters



### シリル・アストレア

聖アストレア王国の王女。清楚で  
柔らかな外見だが、言うべき時には  
物を言う芯の強さを持っている。



### ヒルダ・フランベルク

フランベルクの王女。“雷光の  
姫将軍”の二つ名を持つ。生  
真面目で質実剛健な人柄。

### ラヴィ

齢百歳を超えるハイエルフ  
だが、外見はかなりのチビ  
っ子。シリルの相談役。

### エミリア

ヒルダに忠誠を誓う、伶俐  
極まる女軍師。自信家で高  
飛車なところがある。

るように、唇いっぱいであぐらをかき込む。

唇の感覚全部を使って、男の臭いをこそぎ取り、絡みつかせた舌の腹のざらつきと肉棒の逞しさに打ち震える。

「ち、ちが……だ、誰があなたのモノなど……んじゅるううつつ！ くちゅくちゅ、んちゅううつつ！」

搾り出した否定の言葉も、溢れ出す肉棒の感触に追いやられる。

（ど、どうしてええつつ!? し、舌が……唇が勝手にいつ!? く、おおおつ！ 気持ち、悪いのに……汚らしいのに……つ）

イラマチオを頭では全力で否定しているのに、肉体が言うことを聞こうとしない。舌先が自分の知らない動きを勝手にし始め、か細い首が前後される男の腰に相槌を打つ。

瞳はうつすらと蕩け落ち、太い肉棒を自ら締め付けようと唇がいじらしくすばまっつく。

「ふふ、わかりますよシリル王女。心では望んでいなくても、身体は望む。驚くくらい食欲にね。けれどそれが本当のあなたなのです。王女という、姫騎士というのはすべて本性は裏切り者や魔物に嬲られてなお発情する牝奴隷なのです。気持ちいいでしょう？ やめられないでしょう？」

「ふぐむうつつ!? んぐんぐぐううつつ……ひぎいいつつ!? ふぐおおおつ——ふじゅふじゅううつつ！ ちゅるちゅる、ふむうつつ……んもおおおつ——!!」

漏れ出る声がだんだん野太く艶っぽいものに変わっていく。触手に雁字搦めにされた体がビクビクウツと震えだし、艶かしい太腿や丸出しのお尻が張りを増していく。

（く、悔しい……っ！ こんなに悔しいのに……負けたくないのに、ほおおおっつ、んぐ、じゆるううっつ!!）

王女としての誇りが、口内いっぱい詰まった男の臭いとゴツゴツネバネバした感触によつて崩されていく。

なんとか強制肉欲奉仕から逃れようと、必死に身体を捻ってみせるが、触手によつてガツチリと拘束された美体は、逆に男を興奮させる色っぽい仕草をとつてしまう。

「おおっおおんっつっ！ んぶぐじゆるっつっつ……じゆるるっつっ！ ぶじゆるっつ……ほおおおっつ！ んちゆるうううっつ!!」

逆大の字型に固められた身体がギチギチとしなり、グチュグチュという唾液とカウパー汁が混ざり合つた液体が溢れかえる。

薄暗い地下室に、牡と牝の発情しきつた汗のツンとした臭いが充満し、シリルの頭を計り知れない屈辱感がかき回す。

（っつっつ!? な、なにつつ——なんですのっ!? ペニスが……震えて、ビクビクしてええっつ!）

宙吊りにされた女騎士の背筋を戦慄の悪寒が駆け抜ける。王女として温室の箱入りで育ててきたとはいえ、シリルにも一般的な性の知識はある。肉棒の快感が高まる結果起こる、

逃れられない生理現象。それがなにを意味するのか――。

「い、いやああつつつつ！ んぐちゅつつ！ ふぐうつつ、いや、いやですわ……ふぐうつつ！ やめ、くうつつ――やめなさいいしつつ！！ んぐつつ、ふぐうんんんつつ！」

未来の予測はうら若い少女剣士に更なる恐怖と嫌悪感、そして深い恥辱感を植え付ける。それを知って知らずか、灰色の魔術師は後ろや左右に逃げようとするシリルの顔を後頭部でガッチリと押さえ込んで、更に激しく腰を打ち据える。

「ああ、気持ちイイなあ。最高ですよ、シリル王女」

「んんんつつつつ、んぐうつつ！ んじゅるつつ、だ、黙りなさ……ふぐうつつ！ やああつつ、いやああつつあつつ――じゅるぐううつつ！」

ジュポジュポツツジュポツツ！ というあまりに激しい突き込みに合わせて、卑猥な水音が加速する。舌全体を巻き込むように太い雁首が前後し、長大な肉根がマシユマロのよくな唇にジュクジュクと扱き抜かれていく。

気品溢れる美貌が苦悶に歪み、きれいに纏められたブロンドがペニスの出し入れに做つて前後に揺れる。

“その事象”へのカウントダウンが近づけば近づくほどに、舌先にのる男根の味は濃く苦くなり、スムーズな潤滑を促すネバつとした涎が次から次へと染み出して、肉太のペニス陰茎をよりテラテラと輝かせる。

「ひぐううつつ！ じゅるるつ……ちゅぶうつつ、んちゅぐちゅつつ！！ ちゅるるつつ！」

口の中のペニスがブクンッ！ と音をたてて膨れ上がったような気がした。おぞまじすぎるその瞬間を前にして、シリルの表情が恐ろしさと辱めに怯える。

「う、くうう！ ああまずい。もう出そうだ……くつ、ふふ、シリル王女——んんっ、出ますよっつ！ 出しますよおおっつ!!」

「——ぷはあっつ！ なっ、あああっつ……はあはあ、んあ、あああっつつ！」

ジュポンッ！ という水音とともに、ジーンが暴発前にいきなり男根を唇から引き抜いた。そして——。

ブベチャアアッツツ！ ブチユウウツツ！ ドピユオオオツツ！

「んひいひいひいひいっつつ！」

引き抜かれた肉棒の先端から放たれる大量の熱い塊が、凜々しい王女の顔面を激しく打つ。

（あ、熱いですわああ……っ！ 苦くて、臭くて——火傷しそう……っ、くううっ）

ドロリとした感触が、顔いっぱいに広がり、あまりの臭さに息をすることさえためらわれる。今まで戦場で泥や雨にまみれたことはあったが、こんな恥辱は初めてだ。シリルの瞳に怒りと、そしてほんのわずかな恍惚の光が宿る。

「はあはあ……ゆ、許しませんわ。ジーン・マクダウエル！ わたくしにこんなことをするなんて……うぐ、うううっ」

大きく肩で息をする。しかし、囚われの女囚にそんなわずかな安らぎが与えられるはずはなかった。

「はあはあ……んくううつ!? ひぐつつ、んああああつつつ!!」

突然、視界が反転したかと思うと、それまでのうつ伏せ気味の体勢から、触手に拘束された身体がグルリと回転する。

「こ、こんな格好……く、うううつつ」

ザーメンまみれのまま、下唇を強く噛み締める。

強いられた体勢は、俗にいう正常位だ。宙吊りのまま仰向けにされたシリルは、ムッチリと脂ののった引き締まった美脚を左右に大きく開脚させられ、捲れ上がったスカートの奥で、淫靡に皺の寄ったピンクのショーツが丸見えになっている。

大きく実った二つの牝脂肪の塊は、重力に逆らってツンと上を向いており、触手によって根元から締め付けられた柔らかい媚肉が、うら若い王女にたまらないマゾッ気を与えている。

「いい格好ですねえ。女の子はやっぱりこうでなくては。ふふ、いい濡れっぷりだ」

くんくんと、まるで花の臭いでも嗅ぐかのような軽い感じで、男はシリルの秘園へと鼻を近づけた。

「ううつ、この……卑怯者おおつつ!!」

身動きが取れない屈辱の体勢に、思わず怨嗟の声が漏れる。いまだに誰にも見せたことのない恥ずかしい部分、それを間近に見つめられ、拳句にワインのように臭いまで嗅がれるなど、女王たるシリルにとっては考えられない恥辱だ。



「ふふ、では卑怯者ついでに……」

先ほど派手に射精したばかりだというのに、すでにビキビキに凝固している男の肉棒、その先端が、あろうことかシリルの突き出された女壺にグイッと押し付けられる。

「なっ、ま……まさかあなたは、そんな……っ」

男の行為にシリルの表情が一変する。先ほどまでの気丈なものから、明らかに怯えた表情へと移り、どこか青ざめてさえも見える。

男がとったストレートすぎる陵辱の方法。即ち処女を自らの肉棒によって喪失させ、王女のプライドも乙女としての純潔までも奪い去ってしまったおうという卑劣極まりない手段に、シリルの唇が震える。

だが美味そうな牝鹿を前にした、凶暴すぎる牡の欲望は止まらない。

「や、やめ……やめなさいっ！　くう、ああ……ひぎいいいいいいっ！！」  
メリメリ……ブツツツ。

まだ完全に膨らみきっていない陰唇へ、半ば強引に埋め込まれた男の鉄槌の感覚が、一度しかない破瓜の痛みとともに、姫騎士の心に響いてくる。

(ああ、わたくしの処女が……ひ、ひどいわっ)

極太の圧力によって、蜜壺に張られた薄膜がブチッと破れ散る音がわずかに聞こえた。しかし、そんな感傷よりも、続いて襲ってきた快感の大波が、シリルの牝を一瞬で沸騰させる。

たまらない喪失感を忘れさせてくれたのは、皮肉にも身体を中心にしっかりと刻まれた牝の肉の感触だった。

「んはあああああつっつ！　そ、そんな……入って……わたくしの膣内に、はおおうううううっつっつ！」

事実を認めるより先に、たまらない肉の感触と快感に野太い嬌声上がる。

いつか来る愛する人のために、大事にしていた処女の証を、こんな男に奪われた憎しみと憤りは、それを軽く上回る牝の悦びに取って代わる。

「ふほおおおおつっつ！　こんな……こんなあああつっつ！　う、嘘ですわっ——こんな、の……こんなのつてええつっつ！」

「ん、くう……初物だけあつてキツイですねえ。けれどいい感じですよ、シリル王女。わかるでしょう？　私のチンポが、あなたのアソコに……濡れ濡れのマンコにズッポリ入っているのですよ」

「う、嘘ですわ……こんな……ひ、ひどいいい。うう、いやあああつっつ！」

受け入れたい衝撃にフルフルと唇が震え、同時に喉の更に奥から搾り出すような悲痛の叫びがこだまする。

目を背けたいけれど、背けられない。ムッチリとした魅惑の両脚の間でジュクジュクと濡れ光るワレメに、戒めの杭のように打ち込まれたグロテスクな男根は、根元までがズブッとシリルの蜜壺に突き込まれてしまっている。



しかも両足首には両手と同じような黒い足枷がはめられており、こちらは鎖に多少の余裕があるものの立ち上がるところか、大きく広げられた悩ましいおみ足を閉じることさえかなわない。

両手両脚を冷たい石床につけたままの、まるで犬猫のような四つんばいの格好を強要され、誇り高い銀の姫騎士の心が屈辱にまみれる。

姫將軍を象徴する鎧は着たままだが、自慢の大剣はどこかに取り上げられてしまっていた。「く、ううっ……っ」

なんとか縛めを解こうと鍛えられた身体を捻るたびに、埃臭い倉庫の中でも艶を失わない黒いポニーテールが、儂げに揺れ動く。

こんな屈辱的な状態にあつて、いまだに強気を失わない鋭い瞳をのせた美貌や、突き出されたお尻や乳房の揺らめきが、ひどく色っぽく映るのは、囚われの王女に対する悲しい皮肉だった。

（せっかく戦争の元凶を追い詰めたというのに……シリルと秩序ある世界を築けると思つたのに……くっ）

悔やんでも悔やみきれない憤りがヒルダの胸をよぎる。

シリルやエミリアたちの協力を得て、やっとこの戦いを終わらせることができたと思つた。その機会が目の前にあつた。

しかし現実には、その機会を逃し、あまつさえこうして囚われの身となっている。

ヒルダが憎き魔術師の顔を思い浮かべなら、わずかに感じる媚熟の疼きに耐えていると、ふいに目の前の床に魔法陣が現れた。

「き、貴様は……っ！」

「やあ、元氣そうでなによりですね。ヒルダ王女」

ジーン・マクダウエル。アストレアとフランベルク、二つの国を戦火に巻き込み、己の欲望を満たたさんとする悪意の魔術師だ。

男は、無様な四つんばいの格好を強いられている黒髪の剣士を、嘲るような態度で見据えた。

「イイ格好ですねえ。それに私のことを強く憎んでいる。ふふふ、矜りがいがありそうですよ」

「ふざけるなっつ！ 貴様のせいでどれだけの人が苦しんだと思っている!? 貴様は倒す！ この私の手でっつ！」

身体を無理やりグイッと動かして男の方へと少しでも近づこうとする。

ジャラッという鎖の音が響くが、そんなことなど構わないといわんばかりの勢いでヒルダはジーンを睨み付けた。

「意気がいいですね。さすがは血の気が多いフランベルクの王女といったところでしょうか？ それに——」

男は、まるでいきり立った獣のような表情のヒルダを、薄汚れた両の目でジロジロと、

値踏みでもするかのように見つめた。

「くっ、そんな目で見るな、汚らわしいっ！」

魔術師の色情に満ちた言動と視線に、思わず身体を隠そうとするが、両手は固定され、更には脚を閉じることかなわないとあつては、今まで以上に男をきつく睨み付ける他なかつた。

ともすれば男を誘う女豹ともとられかねないセクシーポーズで囚われているヒルダの身体は、ただでさえ肉感的であるのに、男の自卑た視線を感じているからだろうか——今では肌が更にピンッと張り詰めており、紫と銀の鎧の間から伸びる育った美脚などは、むしろやぶりつきたいくらいの妖艶さを誇っている。

更には凜とした表情にも、頬はうつすらと朱を含んでおり、時折唇から零れる惱ましい吐息などは、もし許されるのであれば、国中の男たちが一夜をともに過ごしてくれと懇願しにくるほど官能的なものだ。

「それでは始めましょうか。せいぜい頑張ってほしいですね、ヒルダ女王」

ジーンは右手に小さな魔法陣を作り、ひとつの器具を召喚した

「くうっ、な……なんだそれは!？」

ヒルダが驚くのも無理はなかつた。それは半透明の固そうな材質でできており、表面に細かい目盛りが刻んである。先端には穴の開いた突起。後端にはちょうど男の掌より少し大きいくらいの蓋のようなものが備えられている。

大きさは軽く一抱えはある巨大なものだ。

「これは浣腸ですよ。ああ、もちろん大きさはとんでもなく大きいですが。見たことないですか？」

「か、浣腸だと……あんな大きい……」

ヒルダの小さい頃の記憶に、医師に浣腸をされた記憶がわずかながら残されていた。しかしそのときの記憶と目の前に現れたものとは体積がまるで違いすぎる。

「あなたのような気の強い人には、こういった趣向もいいのかと思ひましてね。くつくつく、その年で浣腸なんて、想像したこともないですよねえ」

男の笑みがやたらと不気味に聞こえる。

子供のときならいざ知らず、この年齢になって浣腸など考えたこともなかった。浣腸している自分を想像することすら、すでに恥辱の範囲内だ。

「なっ、貴様——くうっ、な……なにを……つつ!!」

ふいに魔術師がヒルダの背後に回りこんだ。手にはあの巨大な浣腸器を持っている。男は掲げたお尻に沿って垂れ下がっているスカートに手を伸ばすと、グイッとそれを上に捲り上げてしまった。

同時に四つんばいを強制していたヒルダの拘束具にも魔術をかける。突如天井に現れた鎖によって両手の拘束具ごと上から吊るされる格好になる。

上半身はグンッと仰け反り、銀の胸当てによって保護されている豊かな乳房を、思い切

り強調する姿勢をとらされる。

両脚も今以上に思い切り左右に開かれて、高く掲げられたヒップと相まって、文字通り牢獄の女囚といった状態だ。

「決まっているじゃないですか。ふふ、形のいいお尻だ」

ジーンの手が撫でるように、丸出しになったヒルダのヒップを触る。長い紫のスカートに隠れていた桃尻の表面はスベスベしており、触れば押し返す適度な弾力とキュッと引き締まったセックスシンボルとして理想ともいえる形と性質を誇っていた。

お尻にびったりと張り付いたレースのショーツは、大人びたデザインで、囚われの姫の被虐さを卑猥に彩る。

「くっ、見るな。触るんじゃないっつ！ 貴様、フランベルクの王女である私にそのような下賤なことを……礼儀をわきまえない最低な男だな！」

他人に丸出しの尻をまじまじと見られて、いい気持ちなわけがない。しかも相手は仇敵ともいえる魔術師だ。これまで王女という「上の立場」で生きてきたヒルダにとって、恥辱の体勢のまま見下ろされる行為は屈辱以外のなにものでもない。

「これが私の礼儀ですよ、ヒルダ王女。そう、こうやってムカつく女を牝豚にするのがねえっ！」

男は、女の秘密のデルタ地帯を覆っていたショーツをズイッと左側にずらした。姫騎士の恥毛密林が露になりムワツとした発情臭と湿った汗の臭いが部屋中に広がっていく。



王女らしく丁寧に切り揃えられた陰毛の奥には、いまだ固く口を閉ざした肉の花びらが見える。汗かなにかだろう。ほんのわずかにジユクジユクした湿り気は見られるが、充血はしておらず、エロティックな盛り上がりもまだ浅い。

しかし、男はそんな女の弱点には目もくれず、その上に見えるもうひとつの穴へと視線を落とす。

「くっく、王女といってもココは別段そこらの女と代わり映えがしませんねえ。まあ、これからどう変わるか楽しみですが」

ジーンは右手に持つ……すでに担いでいるといった方がいいかもしれない巨大浣腸器をヒルダの菊門へと狙いをつける。魔力で用意したのだろう。注射器の中には薄めたスライムにも似た緑色の怪しい溶液がたっぷり詰まっております、タップと波打っている。

「ま、まさか貴様本当にそれを……!?!」

これまで強気を失わなかったヒルダの声音が、ほんのわずか恐怖を帯びたものへと変わる。見たこともない巨大な注射器とその中を満たす怪しすぎる溶液。そしてうら若き姫騎士にはまるで似合わない浣腸という恥辱行為に悔しさが込み上げる。

「当然ですよ。さあ、存分に味わいなさい。騎士王女さまっつー!」

「なっ、ま……やめ、んぐううううんっつー!」

ズボウツツ! ビチュツツツ! ビチュチュツツ! チュプウウツツツ!

問答無用でいきなり突き込まれた浣腸に、ヒルダの肛門がプワツと広がり、周りの皺が

限界まで伸ばされる。

掲げたお尻がプルッとわななき、広げた美脚がプルプルと痙攣する。お臍の辺りの腹筋が悩ましそうに揺れ、突き出たバストが胸当ての中でブルンッと震えた。

「くおとおおっ……はあうううっ、くあ……あああっ」

整った美貌が悶え苦しみ、マゾヒスティックなものへと変わっていく。全身から牝のエロモンを含んだ汗がジワリと湧き、鎧の隙間から覗く白い肌を流れ落ちる。

ズチュツツ！ チュルチュル……ピチュウウツツ！

「んあああっつ、はぐううっ……くおとおおっ!!」

（ま、まだ入ってくる。な、なんだこの冷たい液体は……!? 身体の中に絡みつくみたい。おとおおっ、お、お腹の中まで染み込んで——こんなこと、んはああっつ!）

ジーンがゆつくりとピストンを押し込むたびに、圧倒的な量の薬液がヒルダの直腸を通って、胃の奥にまで注入される。

山の雪解け水のように冷たい液体は、お腹の中に入ると突如としてわずかな熱を発するものへと変わる。まるで肛門からお腹の中を覗き見されているようで、黒髪 of 戦姫はたまらない恥ずかしさの中、自慢のポニーテールを左右に振って耐え凌ぐ。

「おやおや、本当に全部入っちゃいましたか……すごいですねえヒルダ女王」

「う、うるさい——くおとおおっ、こ……この程度で私を墮とせるなどと、考えない……んぐ、ことだな——んおとおおおっ!」



ズチュウツツ、ギユウツツ……ギユボンツツツ!

いきなり浣腸を引き抜かれて、思わず艶っぽい声が出てしまった。肛門の肉が捲れかえるかと思つた衝撃に、背筋ごと喉が反り返り、ヒルダの表情が朱色に染まる。

いったいどれだけの量の液体を注ぎ込まれたのだろう。スレンダーだったウエストがぽつこりと、まるで妊娠数ヶ月の妊婦のように膨らんでいる。コルセットのように腰を引き締めているデザインの鎧が膨れたお腹を圧迫し、たまらない嫌悪感に見舞われる。

気を抜けば今にでも注入された薬が、お尻から漏れ出てしまうのではないかと思うくらい姫騎士の体内を通る直腸では緑の溶液が満ち満ちていた。

身体の内側から汚されているかのような屈辱の責めに、ヒルダの切なげな色が色っぽく重なる。

「まだまだお元気なようだ。くく、では直接身体に聞いてみましょうか」

ジーンは空になった浣腸器を無造作に放り投げると、気色悪さに震えるヒルダのお尻の高さに自らの顔を合わせて屈む。

「な……今度はなにを——やめ、ろおおおつ！」

女王の声など聞こえぬとばかりに、ジーンは丸みのあるヒップラインをトロトロの薬液が伝うのを右手の人差し指で掬うと、そのままヒクつく菊の穴に思い切り深く突き込んだ。ズブチュウオオツツ!

「ひいひいっつっ! はああうううっ、き……貴様ああつっ! くっ、そこは——そこ

はああつつ!!」

ヒルダのかすれるような苦悶の聲が響く。

得体の知れないといつても、所詮浣腸液は浣腸液だ。詰まった腸を緩めて中身を排泄させる。一人の女であり、ましてや気高い王女であるヒルダにとって、人前での排泄行為など極度の羞恥を煽るほどの絶対の禁忌だ。

王女騎士の誇りを打ち砕く恥辱すら楽しむかのように、タプタプと腸内を漂う溶液が、淫らな化学変化を起こし、雷光の姫將軍に強い便意をもよおさせる。

すでに注入されてから二分以上が経過している。傍目からはわからないように、強気を装ってはいるが、普通の精神力なら魔術によつて淫靡に改良された浣腸液によつて、信じられないくらい羞恥を味わわされている。

グチュグチュツツ! ヌチュツツ! ズニユルチュウツツ!

「お、おとおおつ——く、ああつ。ひぐうううつ……や、やめる……つ! そんな恥知らずなこと——よくできる、なあはああああつ!? くうううつ……はあはああ……」

緑色の液体でヌルヌルとコーティングされたジーンの人差し指が、第二関節辺りまで挿入され、ヒルダの肛門の入り口を思う存分こねくり回す。

ヌプヌプという汚らしくいやらしい音が耳に届き、そのたびに背筋を絶望への悪寒が走り抜ける。

（お、お腹がい、痛いいいつつ! おとおおおつ、かき回されているつつ——私のお

尻の中を、好き勝手に弄りぬいてええつつ!! はああ、で、出るうつつ!! ダメだ、出  
ては……出してはああつつ!! んああおとおおつつ!!

指の腹が直腸を抉ると、ビクンッと腰が跳ね動く。ただでさえ猛烈な便意に耐えなけれ  
ばいけないというのに、男の指は瓶に溜まった固形のソースを穿り出すかのよう<sup>ほじく</sup>に、執拗に  
強烈に、黒髪の姫騎士のお尻の穴をかき回す。

「辛いんでしょう? だったら出してしまえばいいんですよ。元々そういうものなんです  
から。くつく、雷光の姫將軍の排泄ショ。見れば誰もが悦ぶでしょうねえ」

「く、んつつ——なにをバカなことを……おおつつ!! わ、私は辛くなど……ない、いい  
んんんつつ!! んぐううつつ!!」

精一杯の強がりには、新たに挿入された二本目の指によって、艶やかな悲鳴に変わる。

中指を追加された肛門は、ビクビクと危険レベルの痙攣を始めだし、それに合わせるよ  
うにヒルダの美しい肌が指先に至るまでピンツとこれ以上ないくらいに張り詰める。

美しい黒髪が揺れる額には、女騎士の限界を示す大粒の汗がフツフツと浮かんで垂れ  
落ちる。

痛みに耐えるかのようにキュッと閉じていた唇も、溢れ出る感情の渦を抑えきることが  
できずに、妖艶なアルトをこだまさせる。

「くおとおおつつ!! んふあああつつ!!」

グチュグチュと二本の指が腸内を刺激し、騎士王女の陥落の瞬間を急かす。並外れた精

神力だけでは決して抑えきれないネットリとした腸液が、ブチュブチュと後ろの穴から溢れ出し、自身に生え揃った陰毛すらもヌラヌラと汚していく。

（おとおおっつ、おふおおおおっつ！ も、もう我慢が……っつ——お、お腹がキュウキュウいつている。お尻がジンジンして辛いっつ！ けれど、くふおおおっつっ!!）

いつそのこともうラクになってしまいたい。魔性の劇薬を注入されてから何度そう思ったことだろう。けれどヒルダは寸前でその欲求をはね除けてきた。

王女としての誇り、友との約束。それらすべてを捨てきるなど、騎士である自分にできるわけがない。

「十分経過ですか——すごいですわねヒルダ王女。なみの女騎士ならせいぜい三分が限界でしょうね……でももう無理でしょう。ほら、さっさとギブアップしてくださいよ！」

「だ、誰が……っつ!!? そ、それ……それえええっつ！ やめろおおっ!! やめ……んひぎいいいいっつ！ お、お腹——押す、触るんじやないいいっつ!!」

破滅のギリギリ手前で踏みとどまるヒルダに対し、最後の一押しといわんばかりの責めが追加される。

ジーンは余った左手を女騎士の露になっている臍の部分に押し当てると、そこから直腸をたっぷりと刺激するように指先で〃の〃の字を描き始めた。

（ひぎいううんっつ!! た、たまらないっつ——くああああっつ！ ゴロゴロいつてる……お腹が破れるっつ！ 悔しいのに、出したいいいいいっつ!!）

に姫将軍の顔がほころび、思い切り口をすぼめてクチュクチュと涎を絡めた後、首ごと肉竿を抜きたてる。

「んじゆるっつ、ぷっつ……ふむうんんんっつ！ おおおっ、おいしいっ——おいしいすぎるぞ、チムポオオオオッ！！ ふうんふうんっ、指もイイツ、腋もおおおっ！ 太腿もみんな最高おおおっつ！！」

目を開ければ、手を伸ばせばそこには今なお精力的な無数のペニスがあつた。

男たちは限られた穴だけでは満足できずに、髪や腋、太腿にいたるまで、姫騎士の媚肉すべてを味わい尽くす。

「チンポいいっつ……チンポいいのおおっつ！ チンポがうれしいっつ！ チンポチンポチンポおおおっつ！！」

全身が膾なみの性感帯であるといつてもよかつた。ザーメンで薄汚れた銀色の鎧を纏つた騎士は、ムチムチに張り詰めたいやらしい腰を振りたくつて新たな男を誘い入れる。

「はおおおうっつ、ヒルダばかりズルいですわあっつ！ 皆さん、わたくしも汚してええっつ！！ ほらあ、わたくしの口マンコ犯してええっつ！ 切ないのおおっ——チンポ弄つてないとおかしくなりますわあっつ！！」

シリルは魔改造を施された唇を懸命に広げて、目の前に群がる肉棒たちを舐め漁る。ブクンツと膨れた充血ペニスを、いやらしい舌つきでペロペロと舐め、それだけでブシユウッ！ と熱い飛沫を股間から噴き出す。



「へへ、シリル王女様。いいや牝豚シリルでいいんだよね。そんなに欲しいんならボクのも啜えてよっ！」

「んぽおおおおおっ！ おほおおおっ、こ……こりよもおおおうっ!? おふうううっ！ んおおおっ！」

いきなり口に突き込まれた小ぶりの包茎男根の持ち主は、どう見ても自分より年下の男の子だった。そんな男子が、大人に混じっていきり立った肉棒を押し付け、無理やり王女の唇を犯し尽くす。

「んじゆるっ！ んく……おおおっ、おいしひでふわああっ！ あなら、イイチんぽですわへ……き、気持ちイイわああっ！ んぐじゅっ!!」

シリルはうっとりとした笑みを浮かべた。思い切り唇をすぼめてグジュグジュといやらしい音を立てながら、自分より年下の男根を恥女のようにしゃぶり尽くす。

（ああ、わたくし……年下の包茎チンポで感じてますの!? でもおおっ、でもほおおっ……!!）

プシュウウツツ！ と股座から熱い潮吹きが行われた。

まだ皮も剥けていない男のペニスを頬張る背徳心が、植え付けられたマゾの心を刺激する。

「おい、そんなガキのチンポばかりしゃぶってないで、こっちも抜いてくれよ！ 牝豚シリルさんよおっ！」

「おおううっ、んぐんぐっ……ふへええ、わかり……まひたああっ。んじゆるぶ。ゆ、

指でコキますうっ！ お、お尻にも、マンコにも突っ込んでくださいいいっつ！！ おおうっ、イカせてええっつ！ もっと皆さんの薄汚いチンポで感じさせてええええっ！！」

拘束されながら、ステージ上で肉棒を欲する白の騎士は、新たに突き込まれたペニスに喜悅の笑みを浮かべ、はしたなく尻を振り乱す。

「おおおうううっ！ 気持ちイイッッッ！ アストレアの国民にいいっ、他国の民たちに弄られてええっつ！！ ズンズン突かれてヨガってるのおおおっつ！！」

「おい、魔女さんよおっ!? フランベルクのダサ騎士たちより、俺たちのチンポのほうがいいだろう？ ええ、言ってみるよっ！」

「ああ、そんなあ……そんなことおっつ！！」

アストレアに来て初めて女に目覚めさせられたヒルダにとって、フランベルクでの性経験などあるわけではない。ましてや本物の男根を啜えたのはついさっきのことだ。

騎士たちを束ねる姫として、信頼する部下たちを卑下にすることなどできはしない。けれど――。

「ああっつ、アストレアの方がおいしいっつ！ と、当然だろううっ？ フランベルクのチンポなんて、細くて小さくて早くてええっつ！！ おおおっつ、比べ物になんてならない。お、お前たちの方がいいっつ！ 太くて固いお前たちのがイイいいっつ！！ ほおおおおんっつ！！」

言っている途中で、自らの言葉にたまらないマゾの感覚を覚えたヒルダは、思い切り背

を仰け反って、ブルルツと絶頂する。

淫らなアへ顔を晒すその表情の奥では、自らの国民たちを裏切った背徳心と、それによって更なる快感を貪ってしまうマゾ奴隷の感覚が卑猥に混ざり合っている。

「けけけ、そうだよなあつつ！ ご褒美だつ、もつともつと突っ込んでやるからなあ。おいしいおいしいチンポ様をよおつ！」

「んおおおおうつつ——おいひいでふうつつ！ ひぎいいいつ、ケツとマンコの間で当たってるつつ！ チンポ様、当たって擦れてるつつ……んおお、おはああああつつつつ!!」

裏切りの姫將軍は、全身をブルブルと震わせながら、新たな肉棒を求めて腰を振りたくった。

「イイですわああつつ……ケツううつつ！ ケツの穴がいいのおおつつ!! マンコもいけどお、こつちもイヒイイツツ！ ほおおおつ、イクイクウツツ!!」

「おいおい、俺はてつきり王女様は、トイレにもいかないと思つてたんだがなあ？ なんで気持ちイイんだ、おい。こつちの穴がなんで気持ちいいか言ってみろよ、おう・じよ・さ・ま」

囁かれる嘲りの声、自分の秘めたる官能の火を焚きつける卑劣な言葉に、シリルの首筋がブルツと震える。眉をグツと垂れ落とし、噴火する淫らな溶岩の疼きに、唇を食いしばる。

「え、ええ……き、決まっていますわあ。汚い穴だからですうつつ！ ずつと前からああ、





ああつつつ！ 国民ザーメンつつ！ 牡猿ザーメンんつつつ！ 火傷しちゃいますわあ  
ああつつ！ イグイグウウウツツ!!」

精液の津波でも受けたかのように、ズブチュアアアツツ！ とシリルたちの身体に白濁  
がぶちまけられる。

熱すぎる牡の情欲を纏った本気汁の塊は、身動きの取れない女騎士たちを、悦楽の炎で  
昇天させる。

「おおあああつつつ——きもぢイヒイイツツ！ 膣内出されてるうつつつ！ へええあ  
あ、髪がベトベトおおおつつつ！ みんなみんな、ザーメン臭くなってる……ふほおおおお  
おうつ イクウツツ!! イツグウウウツツ!!」

女の穴だけでなく、全身で感じる最高の快楽に、魔女と裏切りの王女が陶酔する。

金と黒の髪の毛は、ペンキで塗られたように濁った白に変色している。肉棒を握った掌  
の温もりが、灼熱の熱さに変わり、腋や太腿、ヒップラインや臍に至るまで、全身全部が  
男臭いザーメンの熱気に包まれ灼かれ、恥辱のエクスタシーに焦がれている。

『ほおううう……はあ、あああ……ひいううう』

精液まみれになった姫騎士二人が、ベトついた身体を震わせながら、背徳の快感に酔い  
しれる。

淫裂からブシュブシュと噴出し続ける、牝の本気汁と牡のザーメンとが混じり合い、墮  
ちた騎士王女たちに敗北と墮落の香りを染み込ませる。



中出しされた魔獣の精液が着床し、初めての出産を経験してから、いったい何回の出産絶頂を味わわれたのかも分からない。

この部屋に蠢く触手たちは、皆ラヴィがとてつもない快樂羞恥と引き換えに産んだものだ。奴らは人間の赤ん坊と同じように母親のミルクを餌とする。けれどハイエルフと魔獣とではかみ合わせが悪かったのだろう。ラヴィが母乳を噴出することは、幸か不幸か今まで一度もあつたためしはない。

代わりに狙われたのがエミリアだった。触手の圧倒的な数と力にあっけなく敗北した女軍師は、今では触手たちのミルクタンクとして、奴らの腹が満足するまで強制的な搾乳を強いられている。

「んおおおおおつっ……イイイッ、イクウウツッ！ おおつ、腔内なかに……お尻にもおおおとおおつ——それでも中出しいいいいっ！ むふうおおおとおおつっ!!」

エミリアが絶叫し、前と後ろ二穴に突き込まれた触手の集合体によつて更なる高みへと昇り詰める。

化け物たちにあるのは食欲と性欲、この二つだけだ。ラヴィからは出産を、エミリアからはミルクしかできないことを学習できないのか、それともわかつた上で敗北の女たちを甚振いたぶっているのか……本当のことはわからない。

しかし、壁一面を覆うくらいに成長し、増殖した彼らに抗うすが、今の二人にあるはずがなかった。



「イックウウウツッ！ 気持ちイイツツッ——中出しアクメ最高おおおつつ!! ば、化け物の精子ぶち込まれて感じちやつてるううつつ! ふふ、わたし最低ええつ……」

ドピユオオオオオツツ! ブチャアアアツツツ!

猛る触手たちの性欲は果てることを知らず、桶で汲んできたかのような大量の精液をエミリアの二穴にぶちまける。

熱湯を直接注がれたような熱さは、瞬時に確かな快感となって女軍師の発情したグラマラスな身体を絶頂させる。

人間が堪えられる快樂の量をとつくの昔に振り切ったエミリアの顔は、様々な汁にまみれており、眼鏡はベットリと汚れ、余裕の言葉を発し続けてきた唇からは、涎と悅樂に沈んだ女の嬌声が飛び散っている。

「あへへ……もう無理いいいっ。ああああ、無理だっって言ってるでしううううっ!! 子宮に熱いの当たってるっつ——お腹にも臭いの流れてくるううううっつ! おへえええええつつつ……死ぬ死ぬ死んじやうううううつつ!!」

自信に満ちていた切れ長の瞳は、いつ果てるかわからない魔性の快樂衝動に霞み、言葉とは裏腹に灼熱の牡濁流を求め続ける。

「おへあああつつつ……はおおおおつ」

ゴプウウツツ!

すさまじい勢いで放たれる触手ザーメンは、子宮壁に当たって跳ね返り、エミリアに逆

流噴射絶頂を刻み込む。

触手がぎゅぎゅに詰められたワレメと穴の隙間から、ネットリとした白濁が溢れかえる。「おおおうううっ……マンコイイッッ!! ケツマンコも最高おおおっっ! 触手にグチュグチュ犯されてええっっっ! ……できた端から噴出してくうううっっ! おおおっ、気持ひイイわああ……っ」

白い尿を垂らしているような光景に、戦場を我が物とした天才女軍師の欠片など残っていない。

まるで生きたミルク製造機のように、精液注入と母乳噴射を繰り返す。

褐色の肌がところ構わずブルブルと震えまくり、眼鏡の奥の瞳は完全な恥女そのものの醜態だ。

「イイイイックウウウッッ! おほおおおおっっ……ミルク射精イイッッ!! ああ、ヒルダ様ああ。エミリアは、ミルク女ですう。ああ、ミルクミルクウッ……ほめれくらはい、ヒルダ様ああっっ! ふおおおおおおうううっっ!!」

倒錯した愛情が、狂おしいまでの劣情と快樂へと変わる。尽きることのない真っ白い雨は、騎士の国が誇る女軍師の完全陥落を祝福する。

「エ、エミリアああっっっ! おおおううっ、おおっっ……きたああっっ! わらひも大きいのきたああっっ——おおおおううっっっ!!」

仲間の墮落に涙するエルフ少女の小さな身体もまた、至極の人外快樂へ向けて突き進み



始めていた。

ビブシユッツ！　ブシユウウッツ！

「ほおおおおつっ……潮吹いてしまいうううつ……お腹蹴られて潮吹いてイクうううつっ!!　おおつ、イクイクイクイクツツ……いぎいいいいつっ!!」

まるで妊婦の破水にも似た——しかし圧倒的な快楽の上に成り立つ潮吹きが、快感にヨがるエルフの股間から放出される。

ラヴィの子宮には、エルフの超絶魔力によって成長を促進された魔物の子種がウヨウヨしている。

外の世界を求めて暴れる彼らの行動は、媚薬に侵されきった母体にとって、天国と地獄を同時に味わう最高のエクスタシーを刻む。

「ああ、吐き気きたああつっ！　おぶうううつ、酸っぱいのおおつ——も、もうすぐうつ、もうすぐ出るのかああつっ……ひぐおおつ、また……私をイカせるのおおつ!!」

あれだけ気色悪かったお産の鳴咽も、今ではその後訪れるめくるめく快楽のための通過点だ。

内側からの直接愛撫は、最も感じる子宮の中をなんのフィルターも通さずに直撃する。媚薬で敏感になりすぎた性感帯の更に数百倍もの快感は、エルフでなければとつくに廃人になっていてもおかしくない状態だ。

けれどそれが——エルフの中のエルフ、ハイエルフであることが、ラヴィを快楽の波間

から逃さない。

「もうおかひ……おかひくなってる、わたひの身体あぁっつ！ おおうっつ、化け物の赤ちゃんに責められてイクツツ！ わらひ、お母さんなのに——子供に嬲られてイッてるうううっつ!!」

受胎したことによって増幅される母性本能は、プライドの高いエルフ娘を背徳の快樂へへと誘っていく。

「ひぎいいいいっつ！ わらひのお腹どうなってるかわかる……子供たひにどこ弄られるかはつきりわかるのほおおおっつ!!」

百年以上の齡よわいを重ねたエルフが、周りを気にせず快樂を叫ぶ。

もうすでに抵抗しようという気持ちも湧き起こってはこない。生まれてきて、ずっと楽しいことを探してきた。それがやっと思つたのだ。拒絶などできない。ただ貪欲に人外の魔悦を貪るだけだ。

「おおおっつ、おおおっつ！ 子宮がひらぐうっつ!! あの気持ちイイのがくるっつ！ おおおっつ、ほおおんんっつ!!」

M字開脚を強要されたラヴィの背筋がグンツツと思ひ切り仰け反った。ブシャッ！ ブシャッ！ とゆだった牝汁が連続で噴出され、まるでお漏らしでもしているかのように見える。

（イイツツ！ だんだん開いてくるう。ほおおっつ、子宮の道いいいっつ!! ジュルジュ

ルジュールジュール這い出てくるううっ!!)

敏感すぎる子宮の壁を、魔獣の子供たちがずり落ちるのがたまらない。まるで子宮道をイボイボパイプで直接犯されているかのような感覚に、全身が狂ったように震えて絶頂が止まらない。

ボコッと下腹の辺りが膨らむ。便意などとはまったく違う明確な牝の幸福が脳裏に溢れ、視界が真っ白な光に染まる。

「お、おほっつ——出る出るっつ……出ちゃうっつ……ふおおおおっつ、わらひ化け物産むをおおおおっつ!!」

ドベシヤアアツツツツツ! ブシユオオオオツツ!

まるで急な川の流れに放流された稚魚たちのように、ブクウツ! と押し開かれた子宮口から、ビクつく膣道を一気に下る。

快楽の激流たちが女の恥ずかしいワレメから溢れ出す。

「お、おほおおおおおおっつ!!」

本来のそよ風のような声とは、まるで対極に位置する野太い牝の咆哮が響く。瞬間、かわいらしいハイエルフの娘が、恥辱の化け物出産絶頂に酔いしれる。

「ふおおおおっつ! 子供おおおっつ……魔物の子供おおおっつ!! イ、イヒイイイイツツツ!!」

膣穴を無理やり押しつけられる快感がたまらない。子供たちから滲み出す大量の媚葉が、



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

